

国民經濟

大塚久雄著



岩波書店

国 民 経 済

——その歴史的考察——

大 塚 久 雄 著

岩 波 書 店

国民経済

一九八〇年二月八日 第一刷発行 ©
一九八〇年四月三〇日 第二刷発行

定価 一〇〇円

著 者 おおさ 大塚 久雄

発行者 緑 川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋二五十五
発行所 緑 岩 波 書 店

電話 〇三六五二四二二
振替東京六二六四〇

印刷・理想社 製本・青木製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

再刊にあたって

本書は、単行本のかたちでは、久しく絶版のままとなっていたが、今回岩波書店の御好意で復刊されることになった。ただそのさい、叙述内容の理解を補うためにもと、「重商主義成立の社会的基盤」、「重商主義における『Trade』の意味について」、「経済史からみた貿易国家の二つの型」の三論文を、付録として追加した。なお、引用書目中に見える「著作集」はすべて「大塚久雄著作集」(岩波書店刊)の略記である。

おわりに、いろいろとお手数をわずらわした岩波書店編集部、とくに加藤亮三氏に厚くお礼を申上げる。

一九七九年十月廿六日

著 者

改版にさいして

書店の都合で今回版を改めることになったが、そのさい誤記や誤植の訂正のほか、叙述をよみやすくするために、ある程度の加筆をおこなった。しかし、内容についていえば初版と全く同じである。校正に助力された赤羽裕、林道義両氏に謝意を表したい。

一九六七年九月

著 者

まえがき

本書には、戦後二〇年のさまざまな時期にさまざまな形で発表した小論のうち、問題視角において共通したものがあのように思われる一連の論文を集めてみた。題して「国民経済」というが、このテーマに関する体系的著述という意味ではなく、また必ずしも、その一つ一つが何らかの形で「国民経済」という問題を取扱っているという意味でもない。ただ、それらはさまざまな問題を取扱ってはいるが、しかし、そこには、「国民経済」という経済社会学上の重要な概念の意味内容を、いま一度歴史的な視角から十分検討しなおしてみたいとかねがね考えている私の問題意識のさまざまな側面が、期せずして現れていて、したがって、全体として、「国民経済とは何か」という問題提起にもなっているように思われる。「国民経済」という表題をつけたのは、そうした理由からである。

「国民経済」という経済社会学上の概念は学説史上、おそらく、ドイツ歴史派経済学の母胎から生みだされ、すぐれてこの学派の思考様式に結びつくものであったといつてよいであろう。もちろん、現在でもこの用語が慣用されていることは、周知のとおりである。しかし、歴史派経済学の影響力が世界的に昔日のごとくでなくなった現在、その意味内容に十分な学問的反省を加えたうえで、この用語を意味深く使用することはあまりおこなわれなくなっている、といつてよい。これは、当然の成行きといえはいえようが、しかし、近代経済史の研究に携わる過程で、私には、この概念のこのような落魄の状態にはどうしても納得できないものが生じてきた。ことに、経済的「帝国」だとか、コロニアリズムだとかいう諸概念が盛んに使用されるのを見るにつけても、私には、この「国民経済」という概念の意

味内容を、とくに経済史家の立場から、いま一度学問的に十分検討しなおしてみる必要があるのではないかという考
えが、しだいに強まってきたのである。時期的にいうと、こうした問題意識を私はすでに終戦直後から抱いていたの
であるが、その後、いわゆる「自由化」や、低開発国問題の論議のさなかで、はっきりした形をとるにいたったとい
ってよいであろう。この論文集で私が提起しているのは、こうした「問題」なのである。

本書の内容は、第一部「序説」、第二部「富―その近代的形態」、第三部「国民経済―歴史的視野での考察」、この三
部分から成っているが、その成り立ちを示しておくのと次のとおりである。第二部「富」は、旧小著「富」(弘文堂、アテ
ネ文庫)に収めた終戦直後の諸論文に加筆したもの。第一部「序説」と第三部「国民経済」に収めたものは比較的最近
に発表した諸論文で、前者は一昨年(一九六三年)秋に『エコノミスト』誌の「道標」欄に連載した小論、後者は雑誌『思
想』の一九六〇年十一月号および一九六一年六月号所載の論文である。快く転載を承諾された毎日新聞社『エコノミ
スト』編集部および岩波書店『思想』編集部に謝意を表したい。

なお、本書の原稿作成や校正に協力された樋口徹、楠井敏朗の両氏、また本書の出版に好意と援助の手をのべられ
た弘文堂渡辺社長および編集部井上鉄彦氏に心から謝意を表する。

一九六五年九月

著 者

目次

再刊にあたって

改版にさいして

まえがき

国民経済

——その歴史的考察——

第一部 序 説	三
---------	---

一 経営者ロビンソン・クルーソウ	三
------------------	---

二 デフォウの産業都市計画	六
---------------	---

三 重商主義	一〇
--------	----

——訳語の運命について——

四 国民的産業	一三
---------	----

——重商主義政策の支柱——

五 貿易国家の二つの道	一七
-------------	----

第二部 富	三
-------	---

——その近代的形態——

一 近代化の歴史的起点	三
-------------	---

——いわゆる民富の形成について——

二 近代社会の生産力的基盤	四
---------------	---

——貿易国家の二つの型——

三 経済的繁栄の幻像	六〇
------------	----

——投機による擬制的富の結末——

第三部 国民経済	七五
----------	----

——歴史的視野での考察——

一 政治的独立と国民経済の形成	七五
-----------------	----

二 民主主義と経済構造	九六
-------------	----

付 録

重商主義成立の社会的基盤	一三三
--------------	-----

——比較史的な視角からの検討——

一 問題の所在	一三三
---------	-----

二 保護主義と自由貿易論	一三一
--------------	-----

三 保護主義の社会的基盤	一四三
--------------	-----

重商主義における《Trade》の意味について	一六
一 問題の意味	一六
二 重商主義期にみられる《Trade》の用語法(一)	一七
三 重商主義期にみられる《Trade》の用語法(二)	一七
経済史からみた貿易国家の二つの型	一六
一 対象と視角	一六
二 内部成長型	一八
——イギリスにおける国民経済の形成——	
三 中継貿易型	一九
——オランダにおける国民経済の壊滅——	

国民經濟

——その歴史的考察——

第一部 序 説

一 経営者ロビンソン・クルーソー

このごろ経営者の参考書として、徳川家康を主人公にした小説だとか、孫子や呉子の兵書までがよく読まれるという話である。どこまで真実なのかよくわからぬが、ともかく、それを聞いたたびに私は、それならなぜあのデフォウの『ロビンソン・クルーソー漂流記』を読まないのかと、しきりに思うのである。「経済学はロビンソン物語をこのむ」という表現はふつう、経済学者の発想法の抽象性を揶揄するために使われるから、少々奇異の感をもたれる方があるかも知れないが、あの物語のなかには、漂流生活という外形を借りて、あの当時の経営者のいわば理想像が単純明快な筆致で描きだされている、といえるのではないか、というのが私の偽らざる感じだといってよい。

『ロビンソン・クルーソー漂流記』はもちろん、作者デフォウが何か当時の漂流綺譚をもとにして、つくり上げたフィクションにちがいないが、そこに描かれているロビンソンの孤島での生活がかなり特異な姿のものであることは、ちょっと気をつけてみれば、よくわかると思う。それを少し摘記してみると――

彼はときどき感傷的になることもあるが、全体としておそろしくドライで、現実から目をはなさない。だから、難破船のなかに残された消費物資を消費しつくして、あとはたれ死、というような現実への消極的な埋没は決して肯んじない。それどころか、自分のおかれている現実の生活諸条件を見まわしたうえ、島の方々から、難破船のなかか

ら、いま必要な生産資材をいろいろ捜しあつめ、そうした資材と自分の労働力を合理的に配分して、しだいに一つの生産体系をつくり上げていく。そして彼の生活はゆたかになっていく。

彼は、まず、一定の広さの土地を区画して囲い込み、つまり、その当時イギリスの用語でいえばエンクロウジャー（囲い込み地）をつくり、そのなかほどに家屋をたててすむ。そして、自分がそのエンクロウジャーの支配者であることを宣言する。そうしたエンクロウジャーの内部では畑が耕やされ、小麦やなにかがつくられる。鉄砲を携えて猟にでかけるし、海岸でも漁をやるが、山羊を生け捕ってきてエンクロウジャー内部の草地で繁殖させ、食肉用にもするし、その皮で衣服や傘その他の生活用品もつくる。また、土をこね、焼いて、陶器もつくる。そればかりか、土人のフライデーに自分をマスター（雇主）とよばせる一方、彼にイギリス風の生活様式を少しずつ教えこんで、新しい消費性をよびさまし、販路を開拓することも忘れていない。

このようにロビンソン・クルーソーはたえず勤労にいそしみ、作りだされた物資のうち必要なものは惜しげなく消費するが、いやくも浪費ということはない。この勤勉と節約に加えて、きわめて冷徹な合理性が彼の営みすべてを貫ぬいている。たとえば、孤島に漂着してから満一年目のときだったか、日記帳に記されたことがらにもとづいて、一年の漂流生活によってえたプラスとマイナスとを対照し、一種のバランス・シートを作成しているのを、ほほえましく覚えておられる方もあるにちがいない。

ともかく、こうした合理的、組織的な経済生活の積極的建設（および、それに見合う精神態度）こそ経営、とよばれるにふさわしいと私は考えるのだが、読者の方々はどう思われるだろうか。もちろん、ロビンソンのばあいはあまりにも単純なワンマン経済で、貨幣計算もなければ、経営機能と労働の分化もほとんどない。けれども、このロビンソンの経済生活のなかに近代的经营の原型を見出そうとした先例がないわけでもないのである。

「経営」(ペトリープ)という言葉を學術用語として意味深く使用した最初の人、マックス・ヴェーバーであろうと思うが、このヴェーバーが近代的経営の原型——そのなかから官僚的組織を生みだしていく胚種——を問題としたとき、たえず念頭にあったのがフランクリンやデフォウの諸著作であり、ロビンソン・クルーソーの経済生活も、フィクションによるその思想内容の造型として、彼の眼前を去来していたといつてまちがいないのである。そして、こうしたタイプの人間の行動様式を「資本主義の精神」とよんだことは、周知のことだと思う。

ところで、ロビンソン・クルーソーが孤島における長い漂流生活のあいだに一步一步築き上げていったもの、つまり「経営」とよばれるにふさわしいような特徴的な経済生活の様式は、もちろんデフォウの想像力の構想するところであつたにしても、何かのモデルが現実のうちに与えられていたということは、十分に推測できる。いや、実のところ、当時のイギリス経済史を少しでも研究した者には、それが手にとるように見える、といつても言いすぎではない。ずばり言ってしまうと、そのモデルというのは、『ロビンソン・クルーソー漂流記』の冒頭の個所で、デフォウみずからがロビンソンの父親の口をかりて、イギリス国民の繁栄と福祉を双肩に担う「世の中でいちばん良い、人間の幸福にもっとも適した身分」とまで讃美している、当時のイギリス社会における「中産の身分」あるいは「下流の上層」の経済生活の様式にはかならなかつた。デフォウが活躍した十八世紀前半のイギリスでは、重商主義政策に支えられて、工業生産は農村工業の姿をとりつつ各地にひろがり、それを土台にイギリス商船はようやく七つの海に雄飛しはじめていたが、ロビンソンの父親が属したという「中産の身分」の中心部分はそうした農村工業の中小経営者たちであり、そしてこの人びとの経済生活の様式には、ロビンソンのそれをまさに彷彿させるものがあつた、というわけなのである。

こういふしだい、デフォウはこの人びとをモデルとし、ロビンソンの漂流生活というフィクションをかりて、産

業革命前夜のイギリス経済界における経営者の理想像（アダム・スミス風にいうと経済人の理想像）を描いてみせた、と私はいいたいのである。もっと思いついて言えば、この物語は当時イギリスにおいて人間形成の書という役割を果たしたのではないかと思う。トレルチは、『ロビンソン・クルーソー漂流記』がルソーの、さらにその後の教育論に影響をあたえたといっているが、これもそういうふうに考えて、はじめて、うなずける話となる。

ところで、『ロビンソン・クルーソー漂流記』の公刊から半世紀後には、いよいよ産業革命が進行しはじめる。そして、その過程でイギリス産業を工場制度と蒸気力に転ぜしめた経営者たちの中心が、実はまた、デフォウがロビンソン・クルーソーのモデルとした「中産の身分」のなかから生れでることにもなるのである。

二 デフォウの産業都市計画

『ロビンソン・クルーソー漂流記』の著者ダニエル・デフォウは、十八世紀前半のイギリスにおける屈指の政治・経済記者で、おどろくべき博識の持主であった。そして歴大な量にのぼる論説や政治的パンフレットのほかに、その関係のテーマについて、幾冊かの興味深い著書も残している。ところで、その中に『イギリス経済の構想』（二七二八年公刊）という表題のものがある。これは、そのころオランダやフランスをすでに追い抜いて、七つの海に制覇をなしとげようとしていた自国経済への若々しい自信にみちあふれて、当時の内外経済事情の分析にもとづき、イギリス国民経済のあるべき姿を描きだしたものでいいと思う。この書の序論的な部分に、著者デフォウが例の軽妙の筆致で、およそ国民経済建設の指導原理というべきものをいわば物語風に叙述した個所がある。いまから見てもなかなか興味があるので、ここで紹介してみることにしよう。

「私は以前、イングランドの南部で新しい都市を建設するための《Calculation of Trade》(仮りに「分業計画」と訳しておく)なるものを見たことがある」というまえおきで、その「分業計画」の内容を一つ一つ説明していく。「計画」の発端にまず姿をあらわすのは、広大な未墾の荒蕪地をもつ地主の土地分割およびその貸出しの計画である。(一)地主はまず中央に都市建設のための空地をのこして、その周辺に二〇〇—三〇〇エーカーの囲い込み地(エンクロウジャ―)をつくり、裕福な借地農五〇人に貸出して開墾させる。二〇年間地代不要、建築用木材の無償供与。(二)つぎに、都市予定地に定着してさまざまな商工業に従事するような来住者を募集する。庭畑、果樹園つきの小囲い込み地を提供し、一〇年間地代不要、建築用木材の無償供与、といったぐあいの準備ののち、いよいよさまざまな職業従事者の来住がはじまる。

デフォウは、その理想的な過程を次のように想定する。周辺農地における借地農たちの定着につづいて、都市予定地にさまざまな商工業者が、つぎつぎに來住する。まず、肉屋、つづいてパン屋、鍛冶屋、靴屋、革細工人、馬具屋、轆轤職、陶器職、手袋職、繩職、理髪師、産婆などといったぐあいである。そうすると建築の需要がふえるから、棟梁大工や木挽、煉瓦製造工、煉瓦積み工、それから彼らの常雇たちが來住し、風車場が建つ。

このように都市の建設がすすむと、食品店ができ、居酒屋や宿屋、そうとうなホテルまでが建つ。地主は土地を提供して、教会と墓地を建設し、教区と十分の一税の制度を設ける。都市の名はしだいに高まって、食品商、油品商、薬品商、絹物商、帽子商、毛織物商、婦人帽商が大通りに店をかまえ、地主は週市や大市を開催する勅許状を手に入れる。手工業者の数はますますふえ、また、家庭婦人も余暇の労働で糸を紡ぎ、それを麻織布工、毛織布工、麻仕上げ工などが、織りかつ仕上げる。こうして都市建設の過程は終了するが、デフォウはついにでき上がった都市およびその周辺にすむ全人口の職業別一覧表も作成している。